

若きアーティストの皆さんにエールを送ります！！



節分・立春を迎え、また新たな気持ちになる今日この頃です。浜松文芸館の展示「ことごとく未踏～俳人・高柳克弘の世界」もいよいよ終わりに近づいてきました。お陰様で、多くの方に来館、観覧していただき、高柳氏の「俳句を好きになって帰ってほしい」という目標にかなり近づいたのではないのでしょうか。

2月9日(日)、高柳俳句展の最後のコラボとして、俳句と音楽、演劇とのコラボ講演会を開催しました。音楽家の小島ケーターラブ氏は高柳氏の高校、大学の同級生というご縁もあり、スタートは高校の校歌。そして、小島氏のNHK みんなの歌で大好評だった「毛布のうた」が披露され、いよいよ高柳氏の代表俳句を歌にのせて表現。3階ギャラリーホールに小島氏の深みのある歌声が響き渡りました。続いての演劇とのコラボは、私たちの予想を裏切る切り口で展開されました。俳句を演劇で表現するまでの段階を観客に見せるのです。演出家カゲヤマ氏と役者の日和下駄さんの絶妙なやりとりに私たちも引き込まれ、演劇と俳句のコラボという新しい境地に浸ったひとときでした。ラストに出演者によるトークショーが、またまた面白い！飛び入りで参加した、きたしまたくや氏(今回の展示で絵画によるコラボ者)の発言は興味深いものでした。彼曰く、自分にとって俳句とのコラボは、微分ではなく積分だということです。理解に苦しむとはいえ、一考してみたい一言でした。終わってみてしみじみ思ったことです。若きアーティストの皆さんの今後の大変楽しみです。文学で生きていくのも芸術分野で生きていくのもなかなか大変ですが、挑戦し続け芸術に風穴を開けてくれることを心から願う浜松文芸館です。ご協力、ありがとうございました。



つれづれなるままに・・・配架ラックの冊子をどうぞ！

一人の老婦人が、浜松文芸館展示室前の椅子に腰掛けて、熱心に何かを読んでおられる。毎月、半ば頃に見られる光景だ。手にしているのは、俳誌。聞けば、お友達が所属している俳句同好会の冊子にこうして目を通し、後で感想を伝えるのが楽しみなのだそう。「あなたも、句作をなさったら」とお誘いしたところ、自分は、もっぱら観賞するのがいいとおっしゃる。確かに、文学や文芸への親しみ方も人それぞれ千差万別。色々な親しみ方があっていい。ちなみに、自分も、もっぱら観賞派である。創作活動には躊躇するが、様々な分野の作品に触れることは楽しい。勉強になる。というより、心と頭が刺激を受ける。なんだか、たくさんのが学べるようで、ちょっと、賢くなったかな？得をした気分になる。

浜松文芸館廊下の配架ラックには、毎月、全国から送られてくる文芸冊子や文学館から発行された印刷物が並べられる。例えば、浜松市に大いに関わりのある作家、森鷗外や武者小路実篤文学館から送られてくる冊子の立派なこと。文学者の意外な面が分かるなど興味は尽きない。できれば、全国各地の文芸・文学館を訪れたいところだが、それはままならない。ならば、近いところで文学・文芸に親しむというのはどうだろうか。浜松文芸館廊下にある配架ラックで、中原中也や太宰治、吉村昭や井上ひさしが、あなたとの出会いを待っている。時間を気にせずゆっくりじっくり、自分だけの文芸空間を、是非、お楽しみあれ。